

京

流れる水に逆らい
泳ぐ鮎の背

誰かが喜びに溢れ
誰かが哀しみの底

僕はその狭間に立ちつくし
棄て去ることもできぬこの^{いのち}生命

耐え難い気圧の中に
交錯する諦めと欲望

盃を押しやっても
膨らみ続ける ^{こころ}感情・・・

ああ、感情が、僕の感情が
僕自身を押し潰そうとする

苦悶の毎日を帳消しに出来ぬ喜びと
たやすく明るい^{ひかり}陽光を塗りつぶす一瞬の苦痛

存在というものの無意味さが
僕を創造へと駆り立てる

すくい上げた鮎の目は
そんな僕を哀れげに見つめ

無感動と浅薄な人の群れは遠く流れ
この庭にはただ、叫びだけが満ち

そして逃走だけが残るのです
生への逃走だけが残るのです

(1985. 9.20)